

チャーリー・パーカーの「Summertime」の録音についての背景

11038 Summertime (Heywood-Gershwin)

Charlie Parker with Strings

Under the personal supervision of Norman Granz

- プロデューサーであるノーマン・グランツ Norman Granz は 1940 年頃からジャンルを越えた演奏を世に出したいと考え、1944 年、ビリー・ホリディ Billie Holiday がストリングス(弦楽器)を伴奏で歌うことをプロデュースしました。
- チャーリー・パーカー Charlie Parker は、1949 年 5 月にパリ旅行をした際に、クラシックとジャズの融合というアイデアを思いつき、帰国後、グランツにクラシックとの共演を提案しました。パーカーはホリディと親交があり、グランツのプロデュースによりホリディがストリングスと共演したことをパーカーは知っていた可能性があります。
- 1949 年 11 月にパーカーはスタジオに入りましたが、アレンジに不満があり、演奏をしないで帰ってしまいました。そこで、グランツがパーカーを説得し 1 週間後にセッションが再開されました。おそらく、パーカーはストリングスの音色をバックに自分のビバップのスタイルを表現したかったのですが、ストリングスのアレンジがクラシカルで甘美なものだったために、それに合わないと感じた可能性があります。
- パーカーの Summertime の演奏におけるビバップの要素は
 - ・ オリジナルのメロディを基にして、高速で複雑な即興演奏を展開し、その際には、ビバップの典型的なフレーズや音階を多用します。
 - ・ オリジナルのハーモニーを拡張したり、変更したりして、より複雑なコード進行を作り出します。
 - ・ オリジナルのコードを置き換えたり、追加したりして、より多彩なハーモニーを作り出しています。
 - ・ オリジナルの拍子やリズムを変化させたり、変拍子や変奏法を使って、より多様で複雑なリズムを作り出します。
- パーカーは、ストリングスというクラシカルな音色と、ビバップというモダンな音楽スタイルとを見事に融合させました。
- 1939 年 11 月 30 日にニューヨークの Mercury スタジオ録音された Summertime, Just Friends などの演奏は SP レコードのためのダイレクト・カッティングにより行われました。
- グランツはこの作品を Mercury にリリースをし、Mercury レーベルでレコードを出版しました。
- パーカーのストリングスとの共演に対して、当時のジャズ評論家の中には、彼を批判したり、見下したり、売り切れたと非難したりする者もいました。彼らは、パーカーがビバップの革命的な音楽スタイルを捨てて、商業的な音楽に妥協したと考えたと思われます。しかし、パーカー自身は、ストリングスとの共演を非常に楽しみ、自分の作品の中で一番好きだと語っていました。



Buddy Rich(d) Ray Brown(b) Charlie Parker(as) Mitch Miller(oboe) Max Hollander(v) Jimmy Carroll(cond) Milt Lomask(v)